

177号

テンチヌウセツ



40
28

三月二十五日午前九時卒業式
 四月一日午前九時始業式
 午後一時入學式
 四月十三日午後全校沙汰
 四月二十日午前七時横濱町合宿
 百武大將ヲ波止場ニ出陣
 四月二十三日 兒童身休検査
 四月二十七日 靖國神社臨時大祭
 校長視察ノタメ上京
 四月二十九日 午前八時元長節式舉行

三月二十四日 六円六拾銭 學校備品費
 四月二十三日 拾円 保護者會基本金
 四月二十六日 五月 保護者基本金
 四月二十九日 二重橋寫眞
 昭和三十二年三月三十一日 官幣中社録倉官奉買會ノ二円五十銭
 同日 旅順白樺決死隊忠魂塔建設費六円十五銭
 同日 同所ノ二円三十銭
 同四月二日 橋神社創建奉買會ノ二円五十銭
 深川美和子殿
 杉山正殿
 石田テ儿殿
 兵隊殿
 職員兒童一同
 青年學校
 職員兒童一同



ジンニ
 ひよ
 つ

ちいちゃんのうちにはひよこがある
 ます。おかあさんがおこめをといで
 ると、おこめがこぼれたので、あか
 さんが、ちいちゃんのうちのひ
 よこに、やっておいで、といひました。
 ので、私は、すぐに、やりた、いきま
 した。ひよこは、ひよこ、と、なきな
 がら、おこめを、たべました。かほ、を、あ
 らって、げんくわんを、はいで、から、か
 ずひるちやん、の、うちへ、いきま
 した。

オキママ カナメ
 わたくしのうちのひよこは、かほ
 いで、たまりません。わたくしが、おこ
 ると、ひよこが、おどちまます。かほ、い
 ので、おこるの、は、やめました。

さうして、ひよこを見て、ゐると、ひよ
 こ、と、ないて、ゐました。ぼくが、戸
 を、あけて、やると、よりこんで、あるさ
 します。ぼくは、つかまへて、すぐ、こや
 の、中へ、入して、しまひました。
 さうして、ぼくは、見て、ゐました。ソのう
 ちに、お、さうだ、うちへ、いって、おこめ
 を、もって、きて、やら、と、おもひまし
 た。

ナガキ キョウコ
 私は、ひよこが、大すきです。このあひ
 だ、私が、うちの、もんの、所、で、あソん
 で、ゐると、ひよこを、だいた、を、ちさん
 が、ミヤのはま、の、方、から、きました。

私は うちに なない ので ほしい とお
もって おるまに おかふへ いってしま
ひました。私は ひよこ が だいすきで
たまりません。私は うちへ かへって お
はなし しました。

■

イワキ スワイチ

ぼくは ひよこ が かはい くて たまり
ません。ひよこ の なくの を きくと
ひじょう に きもち が いいです。ひよこ
が おこにでも くはれると、とても いや
です。でも ひよこ は おやどり と なみ
よく あソんで ゐます。すると、おやどり
が なく ので ひよこ も なきます。さう
して おやどり が あるくと、ひよこも
あるきます。おやどり と ひよこ は た
かよし です。おちに ひよこ が かつて
あれば、ぼくは かはい がつて、ゆるけれど
ひよこ は かつて、ありません。ひよこ が
ほしい と おもひます。

■ カシハギ ミス

ひよこ が かはい くて たまりません。
ひよこ に えさを やると、おいしさう
に たべます。ミサ も おいしさうに
のみます。さうして おやどりの ソバ
へ いきます。おやどり が すわると
ひよこ が おやどりの はねの 下
にはいります。かゾへて 見ると、十二は
おました。私は ひよこ が なく ので、おや
どりを つれて、きました。
さうして、はこの 中へ いりました。
さうして、また えさを やりました。

こんどから ひらがなでかくこと
にしました。まだ ならはなひら
がなは、かたかなでかきました。
この つぎは、ひらがなばかりでかき
ます。かんじもまじります。

尋ニ綴方

朝

石津道保

月えうの朝であつた。ぼくが起きて外へ出て
見ると、こく道の方へはをらさたいて、わろ
人が通つた。ぼくも早くかほをあらつて井も
すませた。そして和らやんをおんぶして、お
でこのはなへ行つた。するとぼけいせんが
う所をた。ぼけいせんが
「ふー」とぼけいせんが、すると和らやんが
「あー」といふ。しばらくおれりして和
ちやんをおろして、こはんをたべて學校へい
た。

朝

島川公樹

ぼくはこの朝朝おぼくをしました。ぼくが
きて見ると、わろみんはあきておました。ぼく
はおむくをおきやうと思つてもあきらめま
せ。さうやうおきやうがぼくの、あきらめ
りました。ぼくはひつくりしてとあきらま
し。さうするとあきらま

朝

尾崎典子

「早く學校へいかな」と學校があく水です。
といつたのでぼくはいそいでふくきかへて
かほをあらました。そ水からごはんをたべ
て學校へいくともうはじまつておました。ぼ
くはいそいでいけふしつの中にはいりました。
私は朝はやくおきました。さうしてあかつて
の方へいくとあかつて、方ではあきらまさんが
ごはんをおれをくをいしておました。私があきら
まさんが、どあけるとおいしさうな
「あきらまさん、私があきらまさんか
あきらまさんか」
「水をたべたけいけせん」といふので私は
あきらまさんか、そ水から外へ出てみると
あきらまさんがあつた。そ水からうんきに水を
らうとおむつてばけつをむつてあきらまさんが
にいつて水をくみました。さうしてはけけ
はいつてうんきに水をやってこはんをたべて
かつか、いきました。

朝

奥山 涼子

朝ねえちやんにあこさんちけれどおねおんて
おむくて目があかないやでまはれおけいめたか
學校があくゆるかとおもふとおねおんはゆるら
いめでとなあさち。そうときまどからあさ日
がさしこんでわたあでいせいでとけいも見た
らまをろく時ぞつた。それであんしんしんか
ほをあらつておもてへでたらあとうふやさん
かとほつた。そう時ほうくのみせやんとかあ
いたかて私は
「ほあんだまたけいこい」ってうさへ
はいつた

朝

加藤 進

めざましどけいかなった。ほくはどがあさち
もう大時ぞつた。すぐかほをあらつておねお
さんとかいがんへいって見た。もうちくせん
もきてあち。ほくはしんこさふをしち。風が
ふく。ほくはふるくふるへだした。しまかど
とうくくしやみをした。すると向ふう方が

らぐんやうけんをつれさき。ぐんやうけん
は一もくさんにかいがんめかけを走つて来る。
あとからぐんやうけんがあぢさんが走つて来
る。見ると見るとかかんめかけて走つて来る。
とうくかいかんこいた。つくともまりをなけ
た。そうまりをすくぐんやうけんかどつて
来る。しばらくみてあちかあまりさむい
むかへつた。



◎ 四年になつて 市木 晃

僕は今度ゆう等で四年生になつた。だから又四
年生になつても一生けんめいに勉強をしてゆう
等にならうと思つて休み中にも一生けんめいに
勉強した。三年の始めにかあちやんが

ゆう等生になつたら何か好きな物を買つてや
らう

と言つたのでそれから一生けんめいに勉強をし
たのでゆう等をとれたのだ。僕はこのゆう等に
なつた時が一番うれしかつた。
四年生になつたので理科と手工二つおえた。女
にはさい縫もふえやあさち。僕は一生けんめいに
勉強して茨城に居る僕と仲のよい友達と同級生
の三郎さんに負けないうらにしようと思つて今
では一生けんめいである。

教室もかはつて學課もふえた。

校長先生が四月の始に大切な事を三つ教へて
くれた。それは

「始めの決心をどこまでもやり通す事」

これが一番大事なことだ。そのつぎが

「家ではお父さんお母さんの言ふ事をきく事」

學校では先生の言ふ事をきく事

これだけを守ればゆう等になれよと思ふ。

◎ 潮干狩 永田 俊威男

空は晴れたつて、涼しい風がひやりと顔をな
でる。沖の方を見ると、大勢で岩をあけたり、石
をこけしたりして居る。

僕も石をこけて外さふくまででかき始めた。
あさちが見えた。取つて見るとあさちの皮は
かりて中實はなかつた。

廣い洲に大勢の人が喜びさ、やきながらたく
さん取つてゐる。向ふの方では、あ、あつた
あつた。とさわいで居るのが、はつきりと耳に
あつた。

...と思ひました。一年ばかりの間は友達もた
 ...之出来てゆくのに勉強がたまりました。ほん
 ...にはよい所だと思つてゐたのに、今度お別れにな
 ...はけはなりなうなつたのは何だか悲しい氣が
 ...たします。私は内地へかへつてもきつとこの
 ...つかしい小笠原島を思ひ出すこととせう。

● ばりのつぼみ 矢塚惠美子

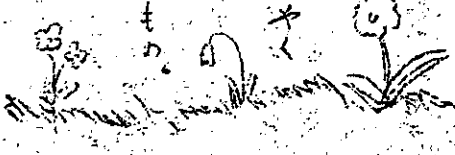
私の家にはうの木があります。私はいつもば
 ...りの花が咲くときつて花びらに差します。その
 ...のおばさんが遊びに来て「このばりの花はどこに
 ...咲くのですか」と聞いたのでお父さんが裏に咲
 ...てゐます」といふとおばさんは「どうですか」とい
 ...てうなづきました。私は本當にばりの香が好き
 ...です。あの何ともいへないよき香をそめて赤い花
 ...びらの色は本當にかあらしりの下人にやるの
 ...はまつたいなさると思ひます。まだつぼみの
 ...で學校に持つて来られませぬ。

● 朝 浅沼良吉

...起きや見たりもなまなまらつた。外に出るには涼
 ...風がやまよ。暖て来た。海岸へ行つて見
 ...たりか又いまおるす音が聞えて来る。波はま
 ...あふよと岸によせる。岩にぶつかつてまづ白
 ...い霧かたが上がる。その霧中にか又いは帆
 ...をばつと沖の方へ進んで行つた。旭山が又お
 ...日様がきら／＼と上つて来て大村中をまわり
 ...出た。あ、美しい朝の海。

● 夜つゆ 菊池スエ

朝起きて庭へ出た。
 ...木にも草にも。
 ...夜つゆがたまつた。
 ...その一つ一つが金色にかがやく
 ...ろつと草をふんだ。
 ...ひやりとさけつたつめたいもの。
 ...あ、夜つゆだ。
 ...きもちが、朝だ。



尋六綴方

野球 小林五郎

か間もなくナエザになつてしまつた。

河内 レーボール コンパイヤーが言った。
 ...一番バッターが一部で僕が二番だ。一部君はふ
 ...つたがはづれた。ストライク。ボールとだんだ
 ...んこえる。いやく、ツー、ワン、ピッチャー
 ...が投げました。ストライク。一部君はアウト
 ...になつた。僕の番が来た。もうふりたくそだ
 ...まらない。ピッチャーがモーションをかけく
 ...げた。僕はストライクだと思つてふつた。
 ...すると「カイン」といつて職員室の前におちた。
 ...ホームは學校の向つて左だつた。アンパイヤ
 ...は「ストライク」といつた。僕は非常によくわし
 ...つた。三番打者がぶるとすぐなサインどをとつた

お友だち 神沢とみ子
 ...私の一番好きなお友だちがお父さんの都合で
 ...船浦にこして行きました。
 ...おコトミちゃんも船浦にいってしまつたん
 ...だ。なんでかたし事だらう。と思ひました
 ...一昨日コトミちゃんも船浦から大村へ泊りが
 ...けでおとぎに来ました。その時はどんなにう
 ...れしかつたかわかりませんでした。
 ...私はコトミちゃんも船浦に行くとき波止場ま
 ...で送つていきました。コトミちゃんも
 ...「アバヨ、とみ子さん」と言つたあとで別
 ...れにおいせよ」といひますので私は可くう

評

▲この文章には多くの色と動きとかが、これの
ます。自然を寫すところは國畫の寫生前
にやうに形を色彩変化して行く有様によ
く注意して下さい。

世本 良子

▲高等二年生となりて
月日のたつのは早いものだ。いさよ／＼と
も高等科に入學して。これからは一層よく
勉強しなければならぬ。勉強の仕方は
―― 先生の一番よいのは、先生が
―― 先生の一番よいのは、先生が
―― 先生の一番よいのは、先生が
―― 先生の一番よいのは、先生が

附記

▲誰でも學期の始めにしてあるやうな勉強を
最後までつづけて行く。大部分の人
が優等になれるわけです。學期の始めに來

心した正しきことをいふ人、
中途でやめず、最後までやり通すこと、
勉強の仕方はこれに練習を加へて、
練習をして行く。と學校で先生の話の二層、
頭に入るやうに祈ります。

石津 妙子

▲花切
「きんぎょ」
朝露が下りて地面はしつと
りじめれぬ。木の葉の間の美しい光
の光がぬれぬ。しばらく行くと山の上の方、白
くツリツヤの花の見ええ。遠くは
―― 白黄紫色と色とりとりに細く優美な葉の
間のツリツヤの花を見ええ。遠くは
―― 白黄紫色と色とりとりに細く優美な葉の
間のツリツヤの花を見ええ。遠くは

昨夜の雨

杉田 喜代三

ザーザーといふ大雨のおとに目をさま
して見ると、さかんに雨が降つてゐる。
思ひ出せば去年秋達が高等二年の時、今夜
のやうな雨の夜の明け方、近くにたつて、
突如、けたたましい鐘の音に近隣の人達
はすぐ表へとび出して、波止場の方へ駈けて行
った。私も、すぐ後から行つて見た。
波止場には、もう澤山の人が集つてゐた。諸
君に聞けば、屏風谷に大水が出て家が危
険だとのことだった。あのときは、まだ
今夜のやうな大雨の日だった。が、な
と思つてゐる内に、今夜は、ほのほの明け
ていった。

衛生

和田 昌明

人生に於て衛生といふことは最も必要な
ことのひとつだと思ひます。
往々流行病が流行するもの、カタルは世人
が衛生に對する材料が足りないのに、大
原因があると思ひます。
昭和九年頃の、六村を、あつた流行性
感冒の原因の一つは、それにあると思ひ
ます。
だから吾々は常に、飲食物の注意を
するとともに、身体、衣類、住居等
の清潔といふことを忘れずはならぬと思
ひます。
其のため、吾等少年消防隊も流行
病予防のため、時々、消毒、どぶ等
撤除を、身身施し、吾等の衛生のため
に働いてゐる次第であります。

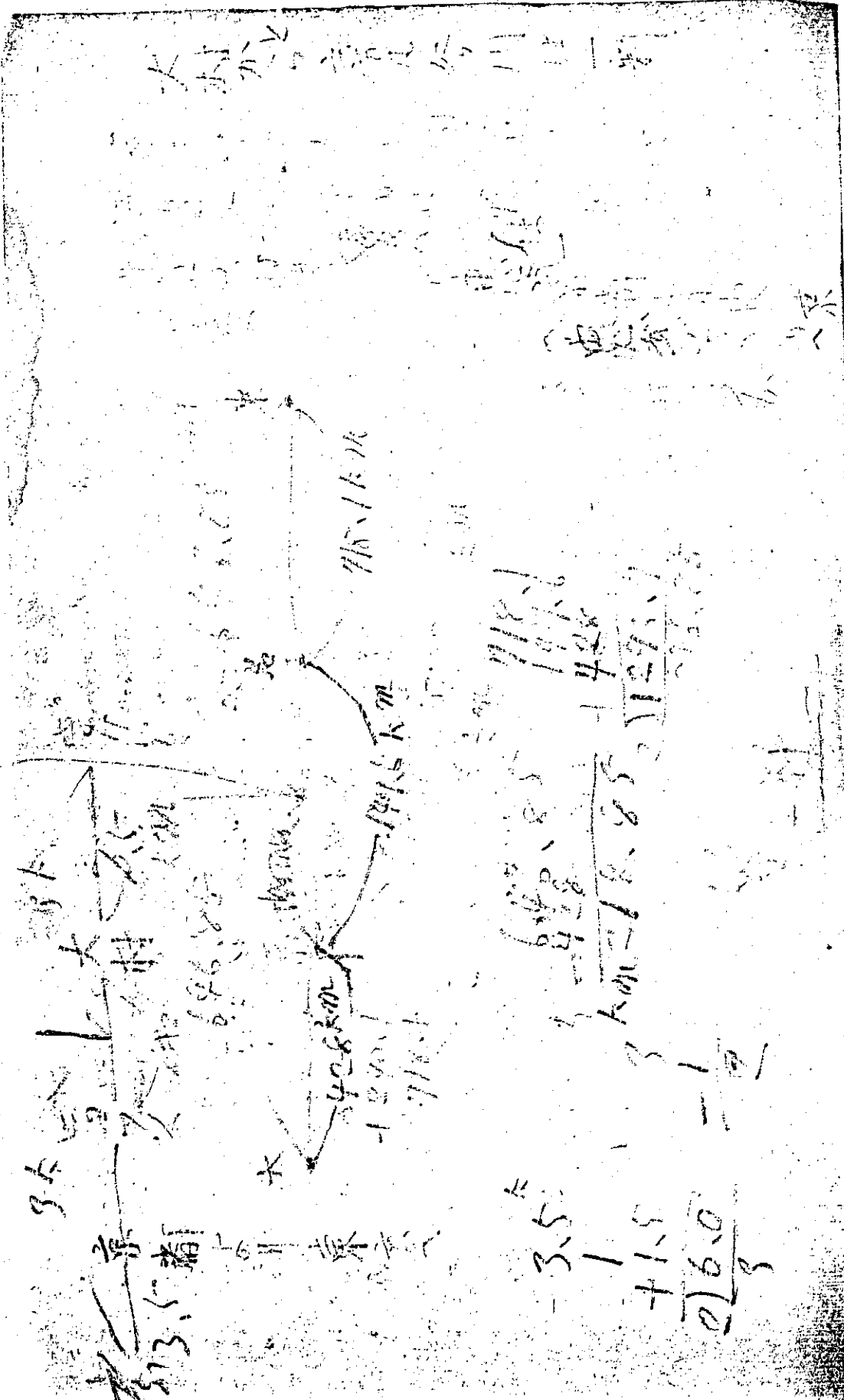
天長節に當つて 菊池かつ

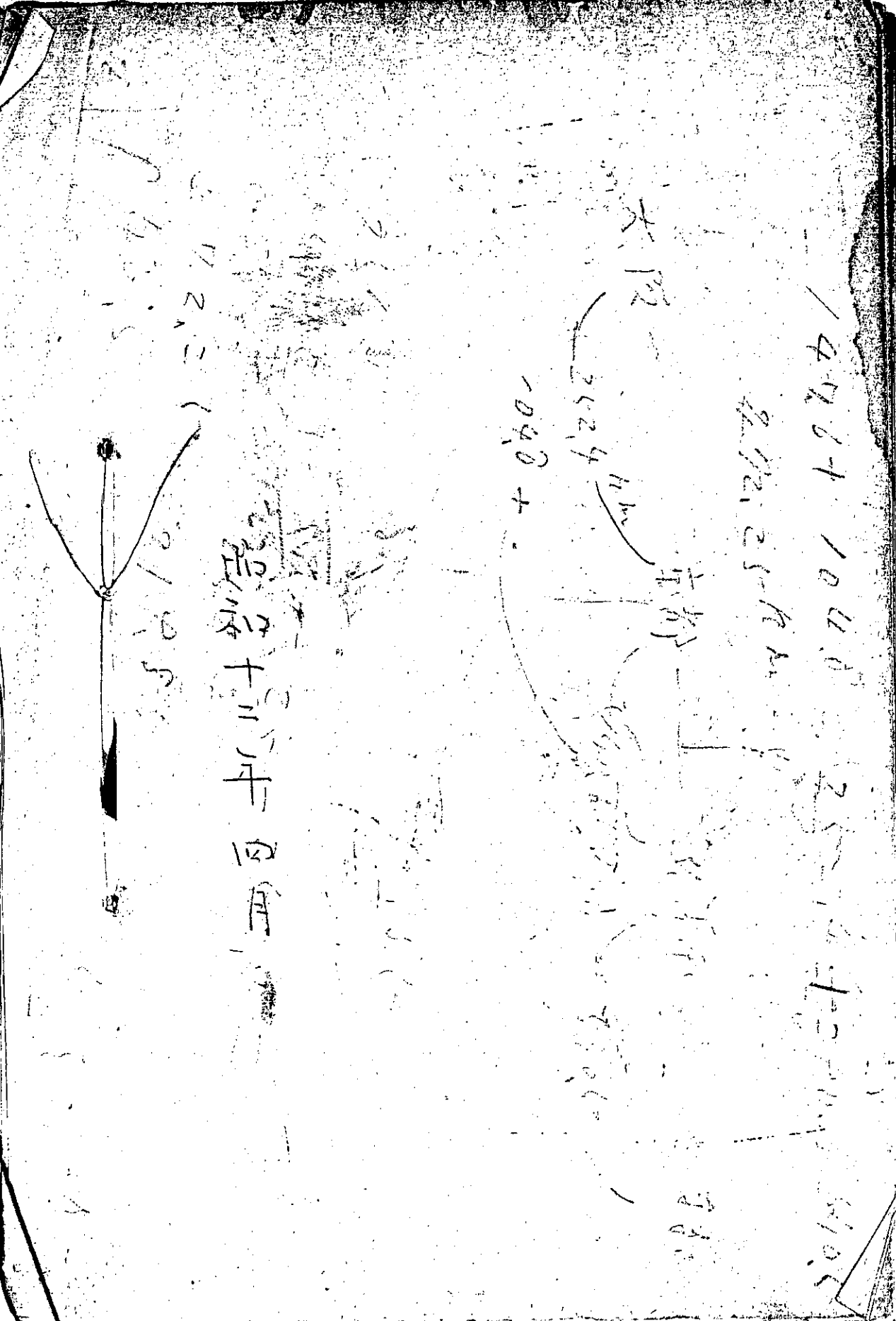
今日は天長節であります。朝起きて見ると雨がしよ／＼降つておりました。昨日から天気が心配でたまらなかつたのであります。八時に登校し八時半から式がはじまりました。天皇陛下の御生乳あまを戴したこのめでたい日に雨など降つて、と思ひました。此のめでたい日には、毎年、白鷺に恩賜品をさくたさいます。これは陛下が御学校の児童に賜つたお金を半紙にかいて下さるのであります。私達は毎年、美の恩賜品をいたゞいてゐるのであります。この有難い恩召を胸にひめて、一生懸命に勉強して忠良な國民の一人となることを忘れはならないと思ひます。

夜の海

井上喜美

サテ／＼と、ひつきりなした小波が海岸に打ちつけて砂や石を洗ひ去つてゆく。暗い海の中、二、三つの燈が、ゆら／＼と動いてゐる。夜釣の火だらう。やがて澄みきつた空に圓い月が掛たかと思ふ。今まで暗かつた海も月の光に照らされてキラ／＼と銀の小波をたてゝゐる。私は窓から首を出して「全くきれいだなあ」と独り言をこゝろかして、しほしの間みとれてゐた。そのうちに時計は八時を打つた。月は益々大へたして、海の間も層一層美しくなる。四方の山々も月明りたぼんやり見えぬ。月は、い／＼と見え行つた。





昭和十二年四月

14761
1040
1040

14761 1040 2524 1040 1040

1040 +

2524

4hr

京都

1040

1040

1040